S.フロイトの性欲論
―幼児性欲と転移の発見―

中　野　明　徳*

S.フロイトの性欲論はヒステリー論と夢理論から編み出された。彼はヒステリーを探究するなかで，神経症を生み出すほどの心的外傷には性的要因が絡んでいることを見出し，夢理論では，夢が現在と無意識の過去をつなぎ，その原動力は見果てぬ願望であることを知った。精神分析理論の中核的な『夢判断』と並ぶ『性欲論三篇』には，フロイトのフリース体験が影を落とす。彼の関心はエディプス・コンプレックスの起源を追究した幼児性欲だけではなく，人間は同性も異性も性対象として選択できるという両性性であり，ナルシシズム的対象選択でもあった。精神分析の技法上で一大発見である転移は，夢と同じように現在と過去の愛情生活を結ぶ強烈な現象であり，性欲動のエネルギーであるリビドーが幼児性欲に固執するからこそ発見できた。彼の性欲論は自我の発達論や構造論にも影響を与えたことから，今日では精神-性的発達論と呼ばれている。

〔キーワード〕性欲動　リビドー　両性性　ナルシシズム的対象選択　幼児性欲　転移

Ⅰ．はじめに

ジグムント・フロイトSigmund Freud（1856－1939）が臨床家として，精神分析の理論家として歩むにあたって，『ヒステリー研究』（1895）は原点である。彼はヨゼフ・ブロイアーの催眠浄化法を用いて治療し，性的要素こそ他の要素にまさって外傷の誘因になることに気がついた。フロイトはブロイアー法を強迫観念症に適用しても同じ効果があったことから，神経症一般の病因として**性的要因**を認識した（中野，2011a）。夢理論の研究中に父ヤコブが81歳で亡くなり（1896年），これがフロイトの自己分析に拍車をかけ，**エディプス・コンプレックス**の発見に至った（1897年）。ここでフロイトはヒステリーの病因として，父に問題があるとする**誘惑理論**から，子どもに性的欲望があるとする**欲動理論**へと転向した（中野，1995）。言い換えれば，精神分析は『夢判断』（1900）によって，トラウマ心理学から無意識を探求するメタ心理学（metapsychology）へと転向した（中野，2012）。

フロイトの研究が夢理論から性理論に移ったのは必然であったが，『性欲論三篇』（1905a）が完成するまで数年の年月を要した。その理由は，一つに彼自身が**幼児性欲**の概念を受け入れるのに躊躇したからと言われ（Peter, 1988），もう一つはドラの治療が中断した理由，すなわち**転移**の概念を発見するのに手間取ったからであろう。従来，フロイトの精神分析は何でも性欲から説明する**汎性欲主義**（pan-sexualism）と非難されてきた。しかし筆者は，幼児性欲ばかりか転移の概念も彼の性欲論が生み出したものと考える。

本稿では，『性欲論三篇』（1905a）を論じた後，幼児性欲を例証した「ハンスの症例」，転移を発見した「ドラの症例」を取り上げて，フロイトの性欲論を検討する。なお，彼が使用したSexualitätという言葉は，日本語では性，性欲，性愛などと訳されている。

Ⅱ．性欲論三篇

1．性的異常

生物にみられる性的欲求（sexual needs）は**性欲動**（Sexualtrieb，sexual instinct）を想定することで表される。「飢え」という言葉は栄養摂取の欲動に対応するが，性欲動の場合はこれに相当する日常語がないので，フロイト（1905a）は**リビドー**（libido）という言葉を用いた。この言葉はラテン語で，羨望，欲望を意味し，ドイツ語ではLust（快感）に相当する。フロイトはこの性欲動の本性や特質を論じるにあたり，性的魅力を発する人を**性対象**（sexual object），欲動にかられて営む行為を**性目標**（sexual aim）と呼んだ。

A　性対象倒錯（inversion）

フロイトは性対象倒錯（インヴァージオン）を以下のように分類した。

a．絶対的な性対象倒錯：性対象は同性に限られ，異性はけっして憧れの対象にならない。

b．両性的な性対象倒錯：同性も異性も性対象になりうる。

c．機会的な性対象倒錯：正常な性対象が手には入らない特定の外的条件のもとで同性を性対象とする。

性対象倒錯者が変質者ではなく，著しい逸脱を示さ

＊a　福島大学総合教育研究センター・教育相談部門

ない人や，高度の知的発達を示し道徳的な教養を備えている人にも見出される。先天的かどうかはa群の極端なものだけに限られ，性対象倒錯が先天的か後天的かという仮定ではこの本質は解明されないという。それよりも人間は**両性の素質**（bisexuality）をもつことに注目して，インヴァージオンを**心的半陰陽**（psychical hermaphroditism）の表現として理解する。

フロイトは性対象選択倒錯のメカニズムを次のように説明した。性対象倒錯者は幼児期の数年に女性（たいてい母親）に対する非常に強烈であるが短期間の固着があり，それを克服したのちは自分を女性と同一視し，自分自身を性対象として選ぶようになる。彼は「**すべての人間は同性を対象として選択する能力がある**」とみて，母親が自分たちを愛したように自分たちを愛そうとしてくれる若くて，自分自身に似た男性を求めることを**ナルシシズム的対象選択**（narcissistic object-choice）と呼ぶ。幼児期に強力な父親がいないと性対象倒錯を起こしやすくなることがまれでなく，この例としてフロイト（1910）はレオナルド・ダ・ヴインチをあげた。

B　性目標倒錯（perversion）

正常な性目標とは性交という行為における性器の合一のことで，パーヴァージオンは以下の例に示される。

a. 性的合一のためのものと定められた身体部位の解剖学的行き過ぎ。たとえば，口唇粘膜，口腔粘膜，肛門を性的に利用することである。性対象の不適当な代理として**フェティシズム**（fetishism）があり，この場合，性的対象の代理として，性的な目的にとってふさわしくない身体部位（足，毛髪），性の対象である人物との性愛の関係が証明される無生物（衣類，下着）が選ばれる。足は昔から性的なシンボルであり，靴やスリッパは女性器の象徴として知られている。

b．最終的な性目標へいたる途上，普通ならばさっさっと通り過ぎる性対象に対して，中途半端な関係なままに停滞すること。凝視の快感がパーヴァージオンとなるのは，①それがもっぱら性器に限局されているとき，②嫌悪の克服と結びついているとき（**窃視症** scopophilia：排尿の際にのぞき見する），③それが正常な性目標を準備するかわりに，むしろこれを抑圧するとき（これは**露出症**exhibitionismの特徴で，相手の性器を見せてもらうため）である。性目標倒錯で最も多いのは，性の対象に苦痛を与える傾向（**サディズム**）と，苦痛を好む傾向（**マゾヒズム**）がある。苦痛における快感は**アルゴラグニア**（algolagnia）とも呼ばれ，サディズムは能動的なアルゴラグニアであり，マゾヒズムは受動的な態度を包括している。マゾヒズムは自分自身に向けられたサディズムに他ならず，同一人物において一緒にみられる。フロイトは性に起源をもつマゾヒズムから**女性的**ならびに**道徳的マゾヒズム**が発展してくると考える。

こうした研究から得られた成果は，①性欲動に抵抗するのは羞恥（shame）と嫌悪（disgust）であり，②性衝動は単純なものではなく，いくつかの成分から複合されたもので，パーヴァージオンはこの欲動から分離していく，ということであった。

C　神経症者の性欲動

神経症の症状は，一方ではリビドー的欲動の代理物であり，他方ではこれに反対する自我の抵抗（羞恥，嫌悪，道徳）に根ざしている。もし症状が意識の牽制を受けずに空想的意図や行為となって現れるならば，目標倒錯の表現を現すことになる。症状の一部は異常性愛の代わりにつくられるので，「**神経症はいわばパーヴァージオンの陰画（negative）である**」とみて，精神神経症者の性欲動は以下のような特徴をもつという。

a．無意識の精神生活においては，インヴァージオンの活動が見られ，同性の人物に対してリビドーの固着が見出される。異性愛的な性の流れが完全な圧迫の犠牲にされて，顕在的なパーヴァージオンとしばしば一緒になっている。

b．解剖学的な行き過ぎの傾向が無意識のうちに症状を形成するものとして存在している。特に口腔や肛門の粘膜に対して性器の役割を要求する。

c．症状形成に目立って役割を果たしているのは，対をなして現れる部分欲動で，のぞきや露出の欲動，能動的または受動的に形成された**残忍性**（cruelty）への欲動などである。この残忍さがリビドーと結びつくことによって，愛が憎しみに，**やさしい**（affectionate）行動が敵意をもつ動きに変わりやすい。

対をなす欲動の片方が無意識に見出されるところでは，対立するものもきまって働いており，能動的なパーヴァージオンには，それに対応する受動的なものが伴う。無意識では露出症者は同時に窃視症者であり，サディズムの抑圧から生ずる結果に悩んでいる人はその症候の一部はマゾヒズム傾向から生じている。精神神経症の顕著な症例では，性目標倒錯的な衝動が一つだけが発展するのはまれで，多数の衝動がみられる。

D　部分欲動と性感帯

パーヴァージオンがそのままに行動にみられようとも，神経症のように陰性の形にみられようとも，これらの倒錯は一連の**部分欲動**（Partialtrieb, component instincts）に還元できる。フロイトのいう**欲動**（Trieb）は，外部からやってくる興奮によってつくりだされる刺激とは異なり，休むことなく流れている**体内的刺激源の心的な代表**である。したがって，欲動は本能そのものではなく，身体的なものから派生した心理的概念の一つである。ドイツ語のTriebは圧迫，促すという意味合いを残している。たくさんの欲動を区別して，特殊の性格を付与するのは，その**身体的源泉**（somatic sources）とその**目標**（aims）に対する欲動との関係である。性的興奮を生み出す器官は，性的な部分欲動

の**性感帯**（erotogenic zone）と呼ばれる。

性欲動は，一定数の部分欲動に分解され，その大部分は特定の性感帯に結びつけられ，一部はその目標によって定義される。性感帯が性器の代理器官として意味をもつことはヒステリーではっきり現れ，強迫神経症では性感帯とは一見関係がないようにみえる新しい性目標をつくる。窃視症や露出症では眼が性感帯に対応し，性欲動がもつ苦痛や残忍性の成分では皮膚が性感帯に対応している。

２．幼児性欲（infantile sexuality）

フロイトは，性欲動が幼年期には欠け，思春期にはじめて目覚めるというこれまでの見解を大きく修正した。幼児性欲がなおざりにされたのは，幼児期の健忘のためであるが，幼児性欲がなければ，ヒステリー性健忘は存在しないことになるという。健忘にもかかわらず心的生活にきわめて深い痕跡を残し，それがその後の発達全体に決定的なものとみたのは，異例な性的興奮がしばしば幼児期にみられるし，分析中にこれまで意識にのぼらなかった神経症者の幼児期の記憶が表面化するからである。

A　幼児性欲の表出

幼児の性的表出としては，**おしゃぶり**（thumb-sucking）が典型的で，多くの小児はここから**手淫**（masturbation）へと到達する。ここで，幼児の性的活動は**性器的**（genital）ではなく，性器以外からの快感とも関係する**性愛的**（sexual）であることに注意しなければならない。幼児の欲動は自分の身体で自ら満足するので，**自体愛**（auto-erotism）である。母の乳房（もしくはその代理物）を吸うことは生命にかかわることであるが，これがやがて快感になることから，幼児の唇は**性感帯**の働きをしたことになる。最初は性感帯の満足感と栄養欲求の満足感は結びついていた。つまり性的活動は，最初は生命保存の機能の一つに依存していたが，のちにそれから独立するとみた。

すべての小児がおしゃぶりをするわけでなく，口唇領域の性感帯が体質的に強くなっている幼児がおしゃぶりを好むとみられる。この徴候がそのまま保持されて成人になると，倒錯的な接吻を好んだり，飲酒や喫煙の誘因になったりするとみられ，これが抑圧されると，食事に嫌悪したり，ヒステリー性の嘔吐を催すことになったりすると考えられる。

B　幼児性欲の性目標

幼児性欲は自体愛的で，ある種の刺激が快感を引き起こすのは皮膚または粘膜のある箇所であり，任意の皮膚や粘膜の部分はいずれも性感帯の働きを引き受けることができるとした。これと似た**移動可能性**（tendency of displacement）はヒステリーの徴候においても現れ，ヒステリー発作をきたす領域は性感帯と同じ性格を有するとみる。

幼児の性目標は選ばれた性感帯を適当に刺激することによって満足感を呼び起こすという点にあるが，この満足感は以前に体験されたことがあるものである。性感帯に投影されている緊張感や刺激感をなくしてしまうような，満足を起こす外的刺激でもって置き換えることができる。このような外的刺激は本質的にはおしゃぶりの場合と同じ吸引に似た操作が含まれる。

C　幼児の手淫（masturbation）

フロイトは，手淫（自慰）に三つの段階があるという。第１段階は幼児期に始まり排尿に関連づけられ，第２段階は４歳前後の短い開花期にあたり，第３段階は思春期の手淫に相当する。乳児期の性的興奮は幼児期に手淫による満足を求めるようになるか，成熟期の遺精に似た現象として再現され，夜尿症は一種の遺精に相当するという。

小児には性感帯の活動とは別に，覗き見の快感，見せる快感，残忍性といった部分欲動が認められる。小児は性的逸脱に対する羞恥，嫌悪，道徳が発達していないので，**多形倒錯的素質**（polymorphously perverse disposition）が備えられ，小児の性生活を目覚すための大人の誘惑（seduction）の影響を排除できるとした。

D　幼児の性探究

幼児の性生活が最初に開花する３歳から５歳は，**知識欲**（instinct for knowledge）または詮索欲に基づく行動が現れる。この行動は昇華された形でもあり，他方で窃視欲のエネルギーが用いられている。小児は次の子どもが生まれたことから，あるいは生まれるという予想から，親の愛情や庇護を失うかもしれないという恐怖が生まれる。この結果，子どもたちはどこから生まれるのかという謎が生じるが，これがテーベのスフィンクスがかけた謎の一つの変形であるという。

フロイトは「**すべての人間に男性器があるのだという仮定が幼児性欲理論のなかで第一に位するものだ**」と強調する。男子にとって，この確信はやがて**去勢コンプレックス**（castration complex）を経て放棄され，女子には自分も男子になりたいという**ペニス羨望**（penis envy）を生むことになるとした。

小児が抱く出産理論は，精液の役目と女性の膣口の存在を知らないので，糞便と同様に腸を通って生まれてくるというものである。小児は成人の性交を目撃すると，その行為をサディズムな意味にとってしまう。この印象が性目標をのちにサディズム的なものに変形させる素質をつくりだすという。

E　性的体制の発達段階

幼児性欲の特徴は，その対象を自分の身体に見出す自体愛と，その個々の部分欲動は互いに独立して快感の獲得に努めるというものである。これが発達して，成人の性生活では，部分欲動は単一の性感帯の優位のもとに，自分以外の性対象において生殖機能に奉仕す

る性目標を達成するための体制を形成していくとみた。性器領域がまだ有力な役割を果たしていない性生活の体制を**前性器的体制**（pregenital oganization）と呼ぶ。

前性器的体制の第１段階は**口唇愛的**（oral）もしくは**食人的**（cannibalistic）体制である。ここでの性的活動は栄養物の吸収からまだ分離していないが，その性目標は対象の**同化**（incorporation）にあり，これは後に**同一化**（identification）としてきわめて重要な心的役割を演ずる。この段階の名残がおしゃぶり行為で，性的活動は栄養活動から分離し，自分以外の対象を放棄して自分の身体に性対象を求める。

この体制の第２段階は，**サディズム的・肛門愛的**（sadistic-anal）体制である。ここでの性生活には，**能動的**（active）と**受動的**（passive）という対立性が形成される。能動性は身体の筋肉系統の側から，受動性は性感的な腸粘膜から生じてくる。いく対もの対立欲動が形成されるが，このあり方をオイゲン・ブロイラーに従って**両価性**（ambivalence）と呼ぶ。

男根的（phallic）体制と名づけられた第3段階では，一つの性対象と，この性対象に向けられる性活動がある程度集中的になされるが，ただ一種類の性器として男性器しか知らないとした。

対象の選択は二期に分かれていて，**二相説**といわれる。第１段階は２～５歳までの間に始まり，その性目標は幼児的な性質をもつ。潜伏期を経て，第２段階は思春期とともに始まり，性生活の形態を決定する。幼児が行う対象選択の結果は後年にいたるまではっきりとその痕跡を残す。この結果はそのまま保存されるか，思春期で更新されるものの，潜伏期にはこれらは抑圧され，その性目標は緩和されるので，性生活の**情愛のこもった流れ**（affectionate current）を見せる。フロイトは情愛の細やかさ，崇拝，尊敬などの背後には幼児児な部分欲動という古い性的活動が潜んでいるという。思春期の対象選択はこの幼児的対象選択を放棄して，新たに**官能的流れ**（sensual current）を発足しなければならない。この二つの流れが一致しないと，一つの対象にすべての熱望を統合しようとする性生活の理想の一つが遂げられないことになるという。

３．思春期の変容

性欲動はこれまでの自体愛から思春期では性対象を見出す。新しい性目標を達成するためにすべての部分欲動が協働して，それぞれの性感帯は性器領域の主宰下に属するようになる。これが**性器性欲の優位**または**性器統裁**（genital primacy）と呼ばれ，性欲動は生殖に役立つものになる。**性器愛**（genital love）とは性対象と性目標に向けられた，「**情愛性（やさしさ）と官能性という二つの流れが厳密に合致すること**」であり，二つの流れは一つのトンネルを両側から掘り進めていくようなものだという。

A　リビドー説

リビドー概念は，性的興奮の領域に起こる経過や変化を計ることができる，量的に変化しうる力として規定されている。フロイトはリビドーのエネルギーと他のエネルギーを区別するにあたって，性的過程は栄養過程とは異なる化学機構をもつと仮定するが，明瞭ではない。性的興奮は性器部分からばかりでなく，あらゆる身体器官によってひきおこされる。そこで，リビドー量という表象を形成し，その心的代表を**自我リビドー**（ego-libido）と名づけ，主体自身に充当されたリビドーの増減，配分，移動によって心的現象を解明しようとした。

自我リビドーが性的対象を占有したとき，すなわち**対象リビドー**（object-libido）になったとき，この対象リビドーが対象に集中したり，固着したり，対象を変えたりするのをみることができる。フロイトはこの見方がヒステリーや強迫神経症といった**感情転移神経症**（transference neuroses）の分析に役立つと考えた。対象リビドーは対象から撤退すると，特別の緊張状態のなかに宙に浮いたままになって，最後には自我に連れ戻されて再び自我リビドーとなってしまう。このような自我リビドーは対象リビドーと対比して**ナルシズム的リビドー**（narcissistic libido）とも呼ぶ。ナルシシズム的ないしは自我のリビドーは大きな貯蔵庫のようなもので，そこから対象備給のためにリビドーが送り出されたり，回収されたりするとみる。このような自我のナルシシズム的リビドーの貯蔵は，幼年期に実現されていた原始状態であって，後年のリビドーの放出の背後に保持されたままでいるという。

ここで問題なのは，精神分析は対象リビドーの変転については確実な教示を与えてくれるが，自我リビドーが自我の中で作用している他のエネルギーと区別できないということである。しかしフロイトはC.G.ユングのようにリビドーを心的欲動のエネルギー一般と一致させることには断固反対し，リビドー概念を性的なものだけに限定することにこだわった。

B　対象の発見

思春期を通して対象の発見が成就する。最初性愛の満足が栄養摂取と結びついていたとき，性対象は母親の乳房であった。この対象は母親の全体表象を形成できるようになった頃に失う。それから性欲動は自体愛的となり，潜伏期を克服した後に，**原初の状態**に戻る。幼児が母親の乳房を吸うことがあらゆる**愛情関係の原型**になっており，この意味で，対象の発見とは本来，**再発見**（refinding）であるという。

小児は潜伏期を通じて自分を愛してくれる人を知るが，それは母親との関係を手本にし，その継続である。小児が自分をみとってくれる人物に対していだくこまやかな感情や評価を**性的な愛**（sexual love）と同一視

する。母親は子どもに対して，自分の行為は性的なものを含まない「純粋な」愛情であると考えるが，母親は性対象の代理をしており，われわれが**情愛**と呼ぶものも子どもの性欲動を目覚せるのだという。

小児の不安は根源的には自分の愛している人物がいなくなるのではないかという表現にほかならない。両親の小児に対する情愛は思春期になって性対象を選択するときの導きとなるが，思春期の対象選択はさしあたり**空想**の中でなされ，それは幼児期に捨て去った幼児的な性の探索と結びついている。小児の空想として，両親の性交，愛する人から誘惑されたこと，去勢の恐怖，母胎に関するもの，**家族ロマンス**family romance（自分は捨て子だった，自分には別のすばらしい親がいる，など）に関するものがある。

これらの空想の中でいくつかの幼児的な傾向が，今度は身体的な力の後押しによって強められて再び出現する。すなわち，母親に対する男児の，または父親に対する女児の性的興奮である。これが**エディプス・コンプレックスの再現**である。近親相姦的な空想を放棄することは思春期の意味深い，しかしもっとも苦痛な心的作業であり，それは両親の権威からの離脱でもある。リビドーの近親相姦的な固着を完全に免れることは難しく，両親に対する幼児の関係がのちに性対象を選ぶ際に影響する。両親の不和，両親の不幸な結婚などは，小児の性愛の発達を阻害し，神経症の素質をつくりだす条件になるとみられる。

４．総括

フロイトは，神経症は**パーヴァージオン**（性目標倒錯）の陰画であるばかりか，パーヴァージオンの素質は人間の性欲動の根源的で普遍的なものであり，成熟に伴って現れる器質的な変化や心的な制止の結果，正常な性行動が発達してくると認識した。幼児期からみられるこの根源的な素質を制限するものは，羞恥，嫌悪，同情，道徳，権威などの自我の構成物とした。

性欲動そのものは部分欲動が合成されたものとみた。性目標倒錯は正常な発達の抑制であり，他面では性欲動の分解であることから，成人の性欲動は小児の生活におけるさまざまな興奮が総括されて統一体になり，一つの目標に向かう欲求になることであると仮定した。精神神経症は性目標倒錯が圧倒的みられるものの，これを抑圧して形を変えたものである。

幼児の性生活には初期から性欲動の諸要素の間にある組織化の萌芽が認められる。前性器的組織化の第１段階は**口唇愛**（oral erotism）が前景にたち，第２段階はサディズムと**肛門愛**（anal erotism）の支配が特徴的で，第３期になってはじめて性器領域の関与による規定をうける。

人間の性の発達には二つの開始期がある（二相説）。性的発達が潜伏期によって中断されることは，人間が高い文化を発展させることのできる能力の条件であるが，同時に神経症になる危険性を含んでいることを意味する。思春期の性器愛は，性的興奮の源泉をすべて性器の主宰のもとに従属することと，対象発見にいたる過程である。しかし長い発達の途上で，いくつかの固着した箇所が発達を阻害する可能性をもたらす。

フロイトは，**性格**（character）が幼児期以来**固着**した欲動や，**昇華**によってえられたものや，性目標倒錯の激情を**抑圧**する構成体などによって合成されているとみる。たとえばフロイト（1908a）は，頑固，倹約，几帳面などは肛門愛固着から導き出される性格とした。早期の性的表出は，ある心的な要因によって**固執性**（pertinancy）や**固着性**（susceptibility to fixation）が高められ，精神生活においては最近のことよりも記憶痕跡の方が優越することを示している。これはのちに概念化された**転移**と関連するであろう。

小児にとって性の大問題について，フロイト（1908b）は，①どこから子どもはくるのかという問，②膣についての無知からくるもの，③両親の性交を直接見ることからくるものをあげている。①は大人に対する不信からくる最初の心的コンフリクト，②は出産の**排泄腔理論**（cloacal theory），③は性交のサディズム理論を生む。思春期に入ると，④精液の存在の無知が現れると指摘する。

Ⅲ．ナルシシズム論

土居（1971）が指摘するように，フロイトは幼児の最初の対象選択に起きるやさしい感情を探究することよりも，彼の関心はナルシシズムに向かった。そこで，フロイトの『ナルシシズム入門』（1914）を見てみよう。

Ａ．性欲動と自我欲動

ナルシシズムは自分の肉体をあたかも対象のように扱って性的な快感を得るという意味では，一種の性目標倒錯である。ところが，この傾向は同性愛者や他の障害の人たちにも見出され，フロイトは人間の性の正常な発達途上にあるのではないかと考えた。このような人が示すナルシシズム的な態度は精神分析が効果を及ぼしうる限界の一つをなしており，この意味では，**ナルシシズム**は性目標倒錯ではなく，自己保存本能のエゴイズムをリビドーが補完しているものとみた。

リビドー理論からみると，ヒステリーや強迫神経者は現実を放棄しても空想の中に人物や事物に対してエロチックな関係を保持しているが，ブロイラーのいう統合失調症患者では，対象から撤収されたリビドーが自我に供給されて**誇大妄想**（megalomania）を形成する。対象への割当を再び内に取り込むことによって生じたものを**二次ナルシシズム**という。自我リビドーと対象リビドーとの間には，一方が余計に使われれば他方が減るという対立関係にある。対象リビドーが最高

に発展すれば恋着状態に陥り，これに対立するものはパラノイア患者が抱く世界没落空想である。性的エネルギーであるリビドーを性的でない自我本能のエネルギーから区別するのは，対象への割当があるかどうかによって可能になるという。

自我リビドーと対象リビドーを区別するのは，性欲動と自我欲動を根源的に区別した仮定によるが，これは感情転移神経症（ヒステリーと強迫観念）の分析結果からもたらされた。この仮定は飢餓と愛の区別に対応しているし，人間が心理学と生物学の二重の規制を受けた存在であることを示し得るという。リビドー理論は心理学的な基礎の上に立っているが，根本的には生物学によって支えられている。

B．依存型とナルシシズム型の対象選択

フロイトはナルシシズムの研究をすすめるにあたり，ヒポコンドリー（心気症）を取り上げる。この患者は自我の関心とリビドーとを外界の対象から引っ込め，両者を自分が気をとられている器官に集中する。感情転移神経症の症状形成は対象リビドーの鬱憤と結びつけられるのに対して，ヒポコンドリーやパラフレニアは自我リビドーの鬱憤と関係づけられるという。

小児および青年の対象選択では，その性対象は自分が味わった満足からきている。最初の自体愛的性的満足は，最初のうちは自我欲動の満足に依存し，後にそれから自立する。まずは母親が最初の性的対象となるような対象選択は**依存型**（anaclitic type）と名づけられた。ところが，リビドー発達の障害を被った人は，母親ではなくて自分自身を選ぶ**ナルシシズム型**を選択する。フロイトは，依存型の対象選択は男性に特徴的で，女性は自分自身を愛しているにすぎず，彼女が求めているのは愛することではなく，愛されることであり，このような条件を満たす男性を受け入れるのだという。男性の同性愛に対してはナルシシズム型対象選択が認められるとした。

フロイトは，すべての人間はリビドーが最初から自我に備給された**一次ナルシシズム**を備えているとした。これを直接観察することは難しいが，やさしい両親が子どもたちにとっている態度は，とっくに放棄された自己のナルシシズムの復活であり再生にほかならないとみた。ここに見られる過大評価は，子どもが両親のかなえられなかった夢を実現すべきものとみているという。この一次ナルシシズムについては賛否両論あり，クラインの対象関係論では，幼児は生まれたときから対象関係を発達させるとして批判している（中野，2011 b）。

C．自我理想

正常な成人ではかつての誇大妄想が抑制され，幼児的ナルシシズムの特性がぼかされる。フロイトは理想形成が自我に抑圧を起こさせる条件であるとみた。幼児期に現実の自我が享受していた**自己愛**（self-love）が振り向けられ，完全性をそなえた自我に変位したものが**理想自我**（ideal ego）と呼ばれる。人間はひとたび享受した満足感を断念することは不可能であので，完全性を確保できなくなると，これを**自我理想**（ego ideal）という新しい形成物の中でもう一度獲得しようとするという。これはいわば幼児のナルシシズムの代理物である。自我理想のなかで理想形成と昇華が同時に行われ，理想形成は自我の要求を高めて抑圧を支援し，昇華は抑圧を引き起こすことなしに性的満足とは別の目標に進ませる。自我理想（1923年の「自我とエス」の論文では**超自我**と呼ばれる）は現実の自我をたえず観察し理想に合わせようとする心的法廷をつくり，良心を生み出す。フロイトはこの中に**夢の検閲者**（dream-censor）を見出す。また，**自我感情**（self-regard）がナルシシズム的リビドーに緊密に依存し，愛情生活において愛されないことは自我感情を低下させ，愛されることはそれを高揚させるとみた。

Ⅳ．エディプス・コンプレックスと性差

フロイト（1925）は解剖学的な性差がもたらす男性と女性の差について強い関心をもっていた。男児のエディプス・コンプレックスは，乳児期からリビドーを割当てている同一の対象（母親）に固執しているから，父親を競争者として感じ，これに代わろうとすることは理解しやすい。男児のエディプス的態度が男根期に属し，去勢不安によって崩壊していくが，**両性的素質**（bisexual disposition）に対応して，能動的と受動的の二義性を備えていることが複雑にするという。父親の愛を対象として母親にとって代わろうとするものを**女性的な心構え**（feminine attitude）と呼ぶ。

男児のエディプス・コンプレックスの前史として，情愛の深い性質をもった父親との同一視は母親をめぐる競争者という意味をまだもっていない。しかし，保護者が幼児性のオナニーを強圧的に圧迫すると，**去勢コンプレックス**が活性化される。夜尿症は手淫の結果だとした。また，両親の性交をのぞき見することが，最初の性的興奮を引き起こし，性愛の発達全体の出発点になりうるという。性交の観察は**原空想**（primal phantasies：子どもたちに共通するいくつかの性的空想で，原光景，誘惑などがある）の一つになる。

女児のエディプス・コンプレックスには，どうして母親を捨てて父親を対象にするのかという大きな疑問がある。父親によって子どもをもうけたいという願望空想が女児の手淫の発動力であり，男根期におけるペニスの発見は女児を**ペニス羨望**（penis envy）に陥らせる。ペニス羨望は女性に男性コンプレックスをもたらし，いつかペニスを手に入れて男子と同じようになろうとする態度をとるか，去勢されている事実を拒否してあたかも男性であるかのように振る舞うことにも

なる。また，ペニス羨望は自分の競争者への嫉妬として生き続け，女児には手淫時に「子どもが打たれる」空想をもたらしたり，母親への情愛が弛緩し，他の子どもへの嫉妬によって母親との結びつきから解放されたりする。解剖学的な差異の認識は，女児を男らしさや男性的手淫から引き離して，女性らしさへと通じる進路に導く。やがて女児はペニス願望を捨てて，子どもをもとうとする願望にかえて父親を愛の対象とするようになると考えられた。

男児のエディプス・コンプレックスは去勢コンプレックス（去勢不安）によって滅ぶが，女性は去勢コンプレックス（ペニス羨望）によって惹起され，女性らしさを促進する。フロイトはエディプス・コンプレックスが単純に抑圧されず，そのリビドーの割当は放棄されて一部は昇華されるが，その対象は自我のうちにとりこまれて**超自我**の中核を形成するとみた。超自我はエディプス・コンプレックスの後継者であるが，この超自我にも性差が認められ，男性の方が峻厳であるとみる。フロイト（1931）は，男児は反抗的な感情をすべて父親のもとで処分するので，母への**アンビヴァレンス**（ambivalence）を解決するが，女性は母親にアンビヴァレンスが強く，そのために女児の性愛活動は受動性と能動性の両方を示すと指摘する。

Ⅴ．症例ハンスと幼児性欲

フロイト（1909）は『ある五歳男児の恐怖症分析』のなかで，症例ハンスの幼児性欲がいかなるものかを具体的に例示した。馬恐怖症をもつ５歳のハンスを治療したのはこの子の父親であり，フロイトはスーパービジョンを行った。父親はマックス・グラーフという音楽家で，1902年にフロイト家で始まった「水曜心理学協会」のメンバーであった（Gay, 1988）。ハンスの現病歴と経過は表１にまとめた。

フロイトは，ハンス少年の観察は幼児性欲理論と見事に一致すると結論した。子どもはちゃらんぽらんではなく，空想力がきわめて活発であり，大人以上に真実を知りたい傾向をもつのだという。幼いハンスは「おちんちん」に対して活発な関心をもち，この部分の自慰によって快感を得ていたが，母親の威嚇で干渉された。ハンスはすべての子どもがありうるように同性愛的でもあったのは，母親から他の対象に転じた結果である。彼が女友だちと一緒に寝たいという性目標の起源は母親にあった。ハンスは幼いエディプスで，母親と結婚して父親を追い払いたいと思っていた。「白い馬に噛まれる不安」は，父親が死ねばいいという願望とつながっていた。ハンスの性的発達に大きな影響を与えた事件は，彼が３歳半のときの妹ハンナの誕生で，新しい子どもに対する敵意も彼に不安をもたらした。

ハンスが抱いた，白い馬が噛むだろうという病状は**恐怖症**（phobia）と名づけられた。抑圧によって病因となる素材から解放されたリビドーが，転換されずに不安として自由になる神経症が**不安ヒステリー**（anxiety-hysteria），心的なものから身体的神経支配へと転じるものが**転換ヒステリー**（conversion-hysteria）であるが，現実の症例では両者が混じり合う。不安ヒステリーは幼児神経症として頻繁にみられ，患者が不安から解放されるのは，恐怖症という抑制や拘束という犠牲によってである。

表１　ハンスの年表

年月	年齢	出来事
1903	0	4月ハンス誕生
1906	3	「おちんちん」への関心
	3:6	去勢の脅かし（去勢コンプレックスの獲得），妹ハンナの誕生（コウノトリ空想）
1907	4	はじめての夢報告
		同性愛的傾向と少女への性的願望
1908	4:9	表通りで馬に噛まれそうだという恐怖の始まり，不安夢を見る，自慰行為を認める
2月		扁桃腺削除後，恐怖症が強まる
3月		女性にペニスがないことを説明
3/27		大きなキリンとグシャグシャのキリンの夢
3/30		父親とともにフロイト診察
4/2		回復の確認
4/9		「うんこ」「おしっこ」に関心
4/11		錠前屋の空想
4/14		妹ハンナのテーマ
4/21		父親が列車を乗り損ねる空想
4/22		トロッコの空想，人形遊び
4/24		子どもの誕生についての説明，母と結婚し子どもをもつ願望
5/2		工事夫の空想
		数日後少年が快癒
1909		フロイト『ある五歳男児の恐怖症分析』を発表
1922	19	フロイトを訪問
1925	22	ウィーン大学で音楽博士取得
1973	70	死去

馬が自分を噛むという不安の背後に，馬が倒れるだろうという深い不安が発見された。ハンスにとって噛む馬も倒れる馬も，両方とも父親であり，父親は彼が父親に対して悪い願望を抱いているので，彼を罰するであろうと彼は考えたのだと解釈された。その後，ハンスの幼い妹ハンナのテーマ，すなわち出産空想に移る。ハンナは大便として生まれ，馬車は妊娠の象徴的代用物であり，倒れる馬は死んでいく父だけではなく，出産の時の母親でもあった。つまり**馬は父親だけではなく母親の表象**でもあった。彼がした人形遊びは**症状**

行為（symptomatic act：無意識の過程が隠れている行為）として，子どもが大便のように産まれることを示した。この症例は母親の出産に関するもう一つのコンプレックスも示しており，父親に対する敵対コンプレックスを表すところで母親に対する情欲コンプレックスを隠しており，これが分析された。馬恐怖は外出を妨げたが，家の中で母親のそばにとどまる手段として役立っていたのである。

ハンスは1922年の春，父親の書斎で論文を発見してフロイトを尋ねた。ハンスは19歳の頼もしい青年になり，申し分のない健康な生活を送っていて，どんな障害もないと言った。両親は離婚し，彼は一人でうまくやっているが，妹とは離ればなれになったという。青年は自分の病歴記録を読んで，ここに書いてあることは全部自分とは無縁の記録ではないかと言った。フロイトは分析が完了した後は，健忘症に陥るものだという。その後，ハンスは父と同じく音楽を専攻して，オペラの演出家として活躍した。

Ⅵ．症例ドラと転移

症例ドラは，フロイト（1905b）の『あるヒステリー患者の分析の断片』に登場する。この論文はもともと『夢とヒステリー』という題で1901年には完成しており，治療半ばと終わりの２回にわたって語られた夢の分析に集中しており，いわば『夢判断』の臨床的使用法を提供した続編であった。しかしフロイトが４年間もその出版を留保したのは，この治療が患者の意志により３ヵ月で中止された理由の考察にあった。つまり，**転移**（transference）という技法的操作の困難な問題に気づくのに時間を要したのである。

18歳の女子患者ドラには１歳半上の兄がいて，父親は40代の工場経営者であった。父は彼女が７歳の頃からずっと病弱で，肺結核，網膜剥離，脊髄癆進行麻痺などに罹患していた。母親は夫の病気以来，すべての関心を家事に集中して「主婦精神病」とでもいえる状態で，洗浄強迫，清潔強迫をもっていた。母娘の関係は数年前からはなはだ悪く，娘は母を見下していた。ドラには発作性の咳，完全失声，不機嫌，交際嫌い，さらに自殺念慮があったために，父の命令でフロイトの治療を受けるようになった。フロイトの診断は小ヒステリー（petite hysterie）である。父親は保養地Ｂにおいて，Ｋ氏夫婦と親交を結んでおり，Ｋ夫人と親しい関係にあり，ドラはＫ夫人になついた。ドラのヒステリーは，Ｋ氏がドラに求愛したことに端を発する。表２にドラの病歴と経過を示した。

病歴はドラの一家とＫ氏夫妻の複雑な人間関係に起因し，父親とＫ夫人の関係にかかずらうドラは，**Ｋ氏に対する彼女の愛を抑圧せねばならなかったばかりでなく，Ｋ夫人に対する深い無意識的な恋愛を覆い隠していた。**以下に夢分析をとりあげよう。

表２　ドラの年表

西暦	年齢	出来事
1882	0	ウィーンにて誕生
1890	7	発作的呼吸困難，夜尿癖
1894	12	片側の頭痛，神経性咳
1896	14	Ｂにおいて Ｋ氏からキスをされる
1898	16	咳と嗄声，フロイトにはじめて会う，湖畔Ｌでの Ｋ氏との一件
1899	17	一家は Ｂ を引き揚げて父の工場のある町へ引越
1900	18	一家はウィーンに引越，ドラが自殺を仄めかし治療開始（10～12 月）
1901		フロイトがドラの症例を書く
1902	19	ドラのフロイト訪問
1903	21	ドラ結婚
1905		フロイト『あるヒステリー患者の分析の断片』を発表
1918		社会民主主義者の兄外務大臣
1932	50	ドラ未亡人となる
1945	63	アメリカにて死去

１．第一の夢

次の第一の夢はドラが繰り返し見た夢である。

「家のなかが燃えています。父が私のベッドの前に立ち私を起こします。私は手早く衣服を身につけます。ママはまだ自分の宝石箱を持ちだそうとしていますが，パパは『お前の宝石箱のために私と二人の子どもが焼死するのはごめんだ』といいます。私たちは急いで階下に降り，家の外へ出たとたんに目がさめました。」

この夢は湖畔ＬでＫ氏が求愛した後，三晩続けて見たものであった。フロイトの解釈によれば，パパはＫ氏に置き換えることができ，「宝石箱」は女性性器を表現するもので，ドラの処女性の危機を意味している。ママはＫ夫人に置き換えることができ，Ｋ夫人がＫ氏に拒んでいるものを彼に贈る気になっているので，ドラの気持がＫ氏になびかないように，パパに対する昔の愛情を喚起したものである。逆に言えば，Ｋ氏への愛情かいかに強いものであるかを証明している。ここで，パパへの思いがＫ氏へと**転移**していると言えよう。フロイトは夢が幼児期をモデルにして現在を修正しようとしていると指摘する。

火と水の対立関係について，火は愛に夢中になることであり，行き過ぎると肉体的欲求（尿意）をもたらすので，夜尿は自慰の興奮を消すことであるという。ドラが分析中に，小銭入れの中に指を入れたり閉めたりしていた**症状行為**は無意識的に小児期の自慰を意味するものであり，ドラには実際に夜尿癖があった。呼

吸困難は成人の性交を盗み聞きしたことが原因であり，ヒステリー症状は自慰による満足の代償で，父親への愛着の気持を喘息発作として表現したものとみられた。K氏を父と置換しょうとする願望，パパと一緒に旅に出たい気持は夢への原動力を与えていた。

2．第二の夢

第一の夢から何週間もたたないうちに，次の第二の夢が現れ，この夢の解釈が終了したときに分析は患者の意志によって中断された。

「私は見知らぬ町を散歩し，見慣れぬ街路や広場を眺めています。それから私は自分の住む家に帰り，自分の部屋に戻るとそこにママの手紙が置かれているのに気がつきます。その手紙には次にように書かれています。『私たち両親に無断でお前が家を出たのでパパが病気になったことを，私はお前に手紙で知らせたくなったのです。でもパパが死んだ今，お前が家に帰りたければ帰ってきてもかまいません』そこで私は駅のほうに行き，駅がどこにあるかを百回ほどもたずねますが，私のえた答えはいつも決まって五分くらいというものでした。つぎに私のまえにはうっそうとした森が現れてきます。私はその中に入っていきます。そこで出会ったひとりの男にまた道をたずねます。彼はまだあと二時間半もかかると答えます。その男は道案内を申し出るのですが，私はそれを断りひとりで歩き続けます。駅が私の前に見えてきますがどうしてもたどりつけないのです。そのとき私は夢のなかで先に進めなくなったときによく起こるような不安感に襲われます。つぎに私は自分の家にいます。この間に私はおそらく汽車に乗っていたに違いないのですが，私には何の覚えもありません。私は門番小屋のなかに入り，私たちの住まいについて門番にたずねます。女中がドアを開けていうのには，ママも他の方々ももう墓地にいってます。」

この夢の背景にはドラのさまざまな復讐空想がある。K氏の突発事件を両親に知らせ，父をK夫人から遠ざけるか，父を動揺させることである。「墓地」にはドラと父の死のテーマがあり，他方，「駅」は女性性器の表現であり，男性が女性性器に入ろうとする**破瓜空想**（phantasy of defloration）が隠されているという。ドラはK氏が再び愛情を向けてくれることを期待していたが，その後何の便りもないので復讐心を募らせ，ひとりで行く決心したと解釈された。この夢の報告の後の治療中断も父親への復讐であった。フロイトは，現実的な愛情欲求の充足不全が神経症の本質特徴の一つであって，患者は現実と空想の対立に支配され，現実化されるおそれのない**空想**に身を任せるのだという。

フロイトは**転移**について，「分析の圧力によって喚起され意識にもたらされる興奮と空想の新版と模写であって，医師という人間と過去に関係した人間とが取り替えられることである」と定義し，「**過去の精神的体験はけっして過去に属するものになるのではなく，医師という人間との現実的な関係として再び活動し始めるのである**」という。精神分析療法にとって，転移は不可欠であるが，これを扱う作業は全治療中でもっとも困難であり，それに比べれば夢の解釈や無意識の変換技術はたやすく学べるものだという。ここでフロイトは，自身がドラの空想の中では父親の代理であったことを認識し，ドラがK氏に復讐したのと同じようにフロイトに復讐し，治療の中で再現する代わりに彼を捨てて，一人で歩んだのだと理解した。

治療が終結し，原稿が起草されて15ヵ月後，ドラは再び治療を求めてフロイトの所に現れた。彼女はK氏にもK夫人にも復讐をとげた後，K氏が自動車にひかれるのを目撃して，再び声が出なくなったと言った。フロイトは彼女の要求が真剣なものでないとして治療を断り，彼女を根本的に病気から解放するという満足をフロイトから奪ったことを許すと約束した。

被分析者の転移に対する分析者の無意識的反応を**逆転移**（counter-transference）というが，ドラがフロイトの自己満足を裏切ったために，今度はフロイトが復讐したと理解することが可能であろう。こうした逆転移があったとしても，土居（1997）は，ドラが本気でないと感じてフロイトが治療を引き受けなかった彼の正直さを評価する一方で，フロイトがドラの依存欲求（甘え）を理解できなかったことを批判する。フロイトは精神的な愛情希求は性衝動の目的が制止されたものと理解したが，依存欲求とは本質的に区別されなければならないというのが土居の主張である。

Ⅶ. おわりに

フロイトの性欲論はヒステリー論と夢理論から編み出された。フロイトはヒステリーを探究するなかで，神経症を生み出すほどの心的外傷には性的要因が絡んでいることを見出した（中野，2011a）。夢理論では，夢が現在と無意識の過去をつなぐこと，夢をつくり出す原動力は見果てぬ願望であることが明らかにされた。彼は『夢判断』の執筆中に父を亡くし，フリースを相手に自己分析を強いられた結果，**エディプス・コンプレックス**を発見するに至ったが，『夢判断』の完成後，フリースとの関係が消滅した（中野，2012）。

ゲイ（Gay, 1988）によれば，フリースは性生活が人生のごく早い時期に始まると主張していたが，フロイトは幼児性欲の概念を受け入れるのに何年も躊躇していたという。ここにはフリースとの関係が影響しており，人間には**両性性**があると最初に提唱したフリースに対して，フロイトは彼に未完成の『性欲論三篇』に目を通して，両性性に関する箇所をチェックしてく

れないかと申し出たが，フリースは相手にしなかったという。フロイトのフリース体験とはいわば同性愛体験である。彼の強い関心はエディプス・コンプレックスの起源を追究する**幼児性欲**だけではなく，ハンスにもドラの症例にも見られたように，人間は同性も異性も性対象として選択できるという両性性であり，**ナルシシズム的対象選択**でもあったと考えられる。その後のフロイトにはユングやアドラーとの別離があり，このテーマは長く続くことになる。

精神分析技法上の一大発見である**転移**は，夢と同じように，現在と過去の愛情生活を結ぶ強烈な現象である。彼がリビドー説に固執したからこそ発見できたものであり，リビドー論を捨てた者から転移の概念は消えている。欲動はより早期の状態へ復元しようとするもので、性的な愛は幼児性欲を目覚めさせる。幼児性欲こそ愛情関係の原型であり，リビドーは形を変えて固執し固着する。彼の性欲論は幼児性欲と転移の発見にとどまらず，自我の発達論や構造論にも影響を与え，**精神ー性的発達論**（psychosexual development）と呼ばれている。

文献

1）土居健郎（1971）：「甘え」の構造　弘文堂

2）土居健郎（1997）：「甘え」理論と精神分析療法　金剛出版

3）Freud, S（1893-95）：*Studies on Hysteria*. Standard Edition, Vol.2. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, 1955.　懸田克躬・小此木啓吾訳（1974）：ヒステリー研究　フロイト著作集７　人文書院

4）Freud S（1900）：*The Interpretation of Dreams*. Standard Edition, Vol.4, 5. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, 1953.　高橋義孝訳（1968）：夢判断　フロイト著作集２　人文書院

5）Freud S（1905a）：*Three Essays on the Theory of Sexuality*. Standard Edition, Vol.7. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp125-254, 1953.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：性欲論三篇　フロイト著作集５　人文書院　pp7-94.

6）Freud S（1905b）：*Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria*. Standard Edition, Vol.7. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp3-122, 1953.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：あるヒステリー患者の分析の断片　フロイト著作集５　人文書院　pp276-366.

7）Freud S（1908a）：*Character and Anal Erotism*. Standard Edition, Vol.9. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp167-175, 1959.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：性格と肛門愛　フロイト著作集５　人文書院　pp133-138.

8）Freud S（1908b）：*On the Sexual Theories of Children*. Standard Edition, Vol.9. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp205-226, 1959.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：幼児期の性理論　フロイト著作集５　人文書院　pp95-108.

9）Freud S（1909）：*Analysis of a Phobia in a Five-year-old Boy*. Standard Edition, Vol.10. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp3-149, 1955.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：ある五歳男児の恐怖症分析　フロイト著作集５　人文書院　pp173-275.

10）Freud S（1910）：*Leonard Da Vinci and a Memory of His Childhood*. Standard Edition, Vol.11. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp57-137, 1957.　高橋義孝他訳（1969）：レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出　フロイト著作集３　人文書院　pp90-147.

11）Freud S（1914）：*On Narcissism: An Introduction*. Standard Edition, Vol.14. trans. Strachey J ,London: Hogarth Press, pp67-102, 1957.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：ナルシシズム入門　フロイト著作集５　人文書院　pp109-132.

12）Freud（1922）：ハンス少年分析後日談．フロイト著作集９　人文書院　pp455-456.

13）Freud S（1923）：*The Ego and the Id*. Standard Edition, Vol.19. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp67-102, 1961.　井村恒郎・小此木啓吾他訳（1970）：自我とエス　フロイト著作集６　人文書院　pp263-299.

14）Freud S（1925）：*Some Psychical Consequences of the Anatomical Distinction Between the Sexes*. Standard Edition, Vol.19. trans. Strachey J ,London: Hogarth Press, pp243-258, 1961.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：解剖学的な性の差別の心的帰結の二，三について　フロイト著作集５　人文書院　pp161-170.

15）Freud S（1931）：*Female Sexuality*. Standard Edition, Vol.21. trans. Strachey J ,London: Hogarth Press, pp243-258, 1961.　懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：女性の性愛について　フロイト著作集５　人文書院　pp139-156..

16）Gay P（1988）：*Freud. A Life for Our Time*. New York: W.W.Norton.　鈴木晶訳（1997,2004）：フロイト１，２　みすず書房

17）中野明徳（1995）：性の心理―セクシュアリティと人格の発達　学校図書

18）中野明徳（2011a）：S.フロイトのヒステリー論―心的外傷の発見．福島大学総合教育研究センター紀要　10：15-24.

19）中野明徳（2011b）：メラニー・クラインの対象関係論―抑うつ態勢と妄想・分裂的態勢．福島大学心理臨床研究６：1-10.

20）中野明徳（2012）：S.フロイトの夢判断―自己分析が生み出したもの．福島大学総合教育研究センター紀要　12：1-10.